

# 俗ニ生キ

入っていたのは、フランスのソリドというメーカーのもの。ドアが開く等の、玩具的なギミックが一切なかった。ダイキャストの造型とプロポーシオンにすべてをささげている。後年、ソリド、英語でいうソリッドという言葉の意味を知り、その自負の強さに驚嘆した。モデルガンも集めた。規制がはじまったところで、總て丁寧なメッキを施し、黒く茶のなおし、銃口に穴をあけた。と、いって、発砲できるように改造するまではやらなかった。連射ができるようにシユマイザーを改造した友達がいて、実際

# 俗ニ死スベシ

に弾がロククリートの壁にめりこんだが、暴発で薬指をもいだ。  
この型も、た。プロモデルには心血を注いだ。中学生になると、映画館通いとソリド収集がはじまり、父の財布から一万円札を毎週のように抜き取った。ある時

# 俗ニ生キ時記

父親に呼ばれて、突然、小遣いを増やしてやろうといわれた。それで父から盗るのを、  
これもありませで、ほとんどアルバイトもしないのに、思いついただけの本を買い、  
そのうえで女ともウロウロしていたのだから、金が足りるわけがなかった。それでも、

# 福田和也

俗ニ生キ俗ニ死スベシ 俗生歳時記

福田和也

俗二生キ俗二死スベシ  
俗生歳時記

二〇〇三年四月二十五日 初版第一刷発行

〔著者略歴〕

一九六〇年生まれ。慶応義塾大学文学部仏文科卒業、同大学院修了。現在同大学環境情報学部助教。一九八九年、『奇妙な廃墟』（国書刊行会、ちくま学芸文庫）を発表以降、文芸評論を中心に刺激的な執筆活動を展開している。一九九三年の『日本の家郷』（新潮社）で三島由紀夫文学賞、一九九五年の『甘美な人生』（新潮社、ちくま学芸文庫）で平林たい子賞を受賞。そのほか、『遙かなる日本ルネサンス』（文藝春秋）、『保田與重郎と昭和の御代』（文藝春秋）、『作家の値うち』（飛鳥新社）、『地ひらく―石原莞爾と昭和の夢』、『現代文学』（文藝春秋）など多数の著書がある。

著者 福田和也

発行者 菊池明郎

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二・五・三 一―一―八七五五  
振替〇〇一六〇・八・四一三三

組版 株式会社ワイズ

印刷 明和印刷株式会社

製本 牧製本

ISBN4-480-81450-7 C0095 Printed in Japan

© KAZUYA FUKUDA 2003

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

〒三三三・八五〇七 さいたま市北区榑引町二・六〇四

筑摩書房サービスセンター

電話〇四八・六五一・〇〇五三

## 目次

七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月
七夕	蛙	晴れ	卯の花	ミモザ	逆旅	寒旱
61	52	43	34	26	17	9

八月 薙露 69

九月 碧 78

十月 帯結ぶ 85

十一月 空の暗さ 93

十二月 アラスカ 102

一月 靴捨てる 109

二月 膝痛む 117

九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月
冷房	舟歌	地唄	龍舌蘭	マロニエ	薔薇	無花果
170	163	157	149	141	133	124

十月 玉碎

177

十一月 心も空に

185

十二月 墓参

192

装幀 日根野圭子

俗ニ生キ俗ニ死スベシ 俗生歳時記



一月 寒旱

気がつくくと厄介な四十男になっていた。

四十と云っても今の世間並みの四十である。風采志操ともに子供と同じで、胸中に居るのは物心ついた時と変わらぬ、童子同然の自分。

内実は子供であっても、身にくっついていっているものは年相応だから始末に悪い。相応を遙かに超した不相応な代物までを、抱え込んでいる。家人、子供、係累、仕事、借金、事故に様々な物や品、事情と拘り、こたわ屈託と狂騒と退屈と回り道。

十一月にナポリに行った。毎日毎日遊んでいるのやら仕事をしているのやら、日本

にいるのか大陸にいるのか、東京にいるのかブダベストにいるのか分からないような生活をしているなか、とにかく出かけることになって成田で飛行機に乗り込んだ時には減入った。

何の慮りもなく、引き受けた仕事を手つかずで残し、こなすべき手続きは全部放置し、送られてくる封書の類はすべて目を通さず捨ててしまい、電話はとらずファックスは捨てる。どれほどの不義理や不具合がそれで生じているのか、点検するのも面倒くさく、点検の仕様もない。見切り発車に見切り発車を連ねて、それでも向こうからやってくる逃れられない面倒だけを引き受けてきたが、四十になるとそれが一斉にやってきた。体調がすぐれない。原稿をやつつける前に疲れが先に立つ。いくつか名前の浮かぶ成人病の自覚症状があるのだが、病院に行く暇も覇気もなく売薬でごまかす。父が入院をする。税金を溜めすぎて、区役所が出版社に手を回している。稿料はすべて前借りしてしまっている。どうにも身動きがとれない処で、ナポリ行きである。

四方八方、借金をして、実のある使い方をしているはずもなく、大方訳のわからない内に散じてしまう。飛行機に乗ればビジネス・クラスに坐っている。遊山なのだし、

どうせ機内でたいしたことは出来ないのだから、エコノミーに乗ればいいのにそれが出来ない。病気で入院している、数年前から事業がうまくいかないで手元が不如意になった父親から借金をして、なぜビジネス・クラスに乗らなければならないのか、まったく道理がわからない。そうせざるをえない。贅沢といったものではなく、その対極にある貧相なもののために。

行列をしない人生。ある映画で、アイルランド人の少年が、マフィアの使い走りをするようになる、日曜にパン屋で並ばないでよくなる。店員が出てきて彼の注文を聞くようになる、というエピソードがあった。私もどこかで、行列に並ばないことを選んでしまったのだろう。行列に並ばないために、多くのものを捨てたのだ。しかも何を捨てたのかははっきりしない。

例えば仕事。知らぬ間に原稿の注文が増え、つきあいはたいして拡がってもないのに、仕事の量だけはどんどん増えていって、遅れながらも書きこなし、書きこなしでいるうちに、評判がいい時もあり、それほど沢山は売れないけれどそれでも商売は成り立つようで、いつの間にか同業の誰よりも忙しくなっているのだが、しかし省

みてみればこれが仕事なのだか、何なのだかまったく分からない。

いや、自負はある。今時の物書きの中では、という自負はあり、またその自負の中では真面目に真剣に書いているのだが、しかし「今時」という相対的な指標をとり去ってしまえば、どういうことになるのか見当もつかない。

愉しみについても同様のことだ。色々な土地に行き、色々な人たちに会う。名物と云われるほどの料理はすべて食べて、その筋がこれという粋な遊びをあらかたこなし、名醸と呼ばれる酒は呑み尽くし、本を、音楽を、あるいは美術を弄<sup>いじ</sup>ってきた。だが一体何が楽しいのだろう。何が飲むのだろう。

陶酔というものは識っている。味わいも知っている。見繕った服が、思いのほか女性にぴったりと似合った時の飲み。遊び疲れて、体中が煙草と酒と紅脂の匂いに浸りきった後に、一杯の茶を焙じて燻<sup>くすぶ</sup>りを吸う時の夢心地。だが、それらすべては元より指の間から漏れ逃げてしまうものであった。

歓楽自体をテーマとして生きようとすれば、明確なスタイル、流儀を作りあげない限り、馬鹿騒ぎを続けていくしかない。それはそれで構わないのだが、果たしてこの

馬鹿騒ぎをずっと続けて、その涯にくたばってしまったのなら、それはそれでよいのだけれど。戦争直後の作家たちの行く末を見るにつけ、ヒロポンがあつた時代が羨ましい。もつとも急逝というのも、始末がいいようで、実際には多くの不始末の束にすぎないのだからうけれど。

先年、ある雑誌でクーデター云々の記事を書いた時に、家人が怒つたのは、私ともう面倒だから、クーデターでも起して、失敗して射殺でもされればよい等と考えているという底意を見破られたからだだが、いずれにしてもその辺りだけは大人である世間の人々は、私の浮薄な計画になど一顧だにしなかつた。

時には落ち着こうかと考える。あまりにも広げすぎた前線を整理するべきか。

だが、落ち着くことなどできるのだろうか。

むしろ、馬鹿騒ぎを続けている時に一番落ち着いていのではないか。

何時から、旅先で夜遊びの前にする宵寝が、一番安楽な睡りになったのか。

機内で読んでいたパヴェーゼの『月とかがり火』の中で、アメリカ滞在時代に彼が一時期一緒に住んでいた、有名になるためには「はしご車の上で大股を広げる」事く

らいやつてのけかねないロザンヌという娘のことを「それでいて、わたしはこの女が好きだった。ときたまの朝の味わいのように好きだった。通りがかりにイタリア人の市場の新鮮な果物に触っていくように快かった」と書いてあった。このような娘たち、女の子、味わいと新鮮さは、いつも手の届くところにあったはずなのに。その味わいを、いつも手元に置いておくただけに、生きてきたはずなのに。

∴

二度のトランジットに疲労困憊して、ナポリのホテルの寢床に潜り込んだ。

朝、目が覚めると強い雨が降っていた。宿は、天井が高く、白い漆喰が無愛想に塗られた、イギリス人好みの十九世紀の古い館だ。

イタリア式に複雑な金具を上にな下に軋ませて、やっと鎧戸を開ける。

ナポリの街は、雨脚に貫かれて、暗く、寒く、陰鬱な風情だ。遥かにぼんやりとヴェスビオス火山の山影が見え、その下に雑然とした市街が、天から振りまかれた罪障